令和４年度秩父市オンライン連載

「秩父氏」をたどる　～その足跡そして現在へ～

秩父市教育委員会文化財保護課

第４回　秩父氏が残した信仰

妙見信仰

妙見は北斗七星あるいは北極星と一体に考えられた聖霊、北辰妙見ともいいます。北極星は、常に真北で輝いていることから、古来より正しい方角を知るための手がかりとされており、日本では、すぐれた視力を意味する「妙見」として崇められていました。北斗の第七星を破軍星と呼ぶことなどから、中世には各地の武士から軍神として崇拝されるようになります。

秩父の妙見信仰は、平安時代末期に秩父氏によってもたらされたと伝わっています。伝承によると、妙見菩薩（神）は当初、秩父市の宮崎山と呼ばれる丘陵上に祀られました。その後、同じ丘陵上を南へ約１ｋｍ移動した「オトクボ」と呼ばれる地点に遷座した後、秩父市宮地地内に祀られたと伝わっています。

こうして秩父の地へ勧請された妙見菩薩（神）は、鎌倉時代末期、落雷のため炎上した秩父神社社殿を再建する際に、神社に合祀されました。この時の伝承が、次の内容です。

「妙見が秩父神社に合祀されることになった時、妙見は七つ井戸を渡って行った。途中一度休んだ。その休んだところが妙見塚である。」

この伝承に登場したものと思われる井戸・井戸跡は、現在も秩父市内に残されており、「妙見七ツ井戸」として知られています。また、妙見が休んだとされる妙見塚は、秩父市の有形民俗文化財に指定されており、秩父神社例大祭（秩父夜祭）の際には、「奉献妙見宮」と書かれた幟旗が立てられました。

妙見塚と幟旗

妙見菩薩（神）が秩父神社へ合祀されると、神社の神体山（現在の武甲山）は妙見山と呼ばれるようになりました。また、神社の例大祭は妙見神を祀る形（御旅所の亀の子石の背中に大幣束を立てる）で行われるようになり、現在まで継承されています。

このように、秩父を代表する民俗行事「秩父夜祭」からも、秩父氏の足跡をたどることができます。

おわりに

ここまで全４回にわたり、秩父氏についての概要や、これまでの研究成果についてご紹介をしてきました。

秩父氏は、鎌倉初期の有力御家人（ごけにん）として活躍した畠山（はたけやま）氏をはじめとする諸氏の先祖にあたります。秩父氏は牧の管理や婚姻政策など、様々な戦略により勢力を伸ばしていきました。そして、彼らの足跡は伝承や遺跡として、現在の秩父に残されています。また、秩父の一大行事「秩父夜祭」からも秩父氏の足跡を垣間見ることができるように、彼らが秩父へ及ぼした影響は多方面にわたります。

今回の連載により、より多くの方に秩父氏及び秩父市の文化財に関心をお寄せいただけますと幸いです。最後までご覧いただき、ありがとうございました。

参考文献

千嶋寿 1981『秩父大祭　歴史と信仰と』
秩父市誌編纂委員会編 1962『秩父市誌』